

■ 住職戯言



無心に坐る

無心に坐る

現代において、無心より、有心の方が、生活感に合致して、有用であるとする意見があります。

広辞苑に、無心の意味の一つとして、遠慮なく物をねだることとあります。

有心を、その反対として、遠慮して、物をねだらない、言い換えれば、よくよく考えて、物を離れて生活することとすれば、物質万能主義からの脱却を図ることとなり、現代において意味があることだと思われます。

また、和歌の世界では、有心とは、人や歌の心を深く込めることとされています。それを、現代に置き換えれば、心を込めた態度で相手に接していくことが有心とすれば、人として大切なものとなりましょう。

確かに、一面、有心の方が、無心に比べて現代においては、有用性が高くみえます。

仏教、禅において、言われる無心とは、そういう有心をも含めて、有る、無しをも超えたところの無心なのです。

大珠慧海禅師の「頓悟要門」には無念は一切処にとどまらない思いとあります。無念とは、まさに無心のことなのです。無心とは、有るということにもとどまらない。無いということにもとどまらない、どこにもとどまらない、何にも、とどまらない心になるということなのです。何にもとどまらないから、何にも生じさせない心。つまり、とらわれのない、こだわりのない自由自在な心になるということなのです。

それは、現代においても、生活していくのに、生きていくのに大事なもののなのです。

現代社会は、家族が分解されています。個人が社会の風をまともに受けているのです。

個人として、社会から与えられる障害を乗り越えていかなければならないのです。

姜尚中さんの「悩む力」「続・悩む力」という本が一時話題になりました。

本の冒頭で、示される姜尚中さんのお母様の姿が印象的です。

涙声でアリランを口ずさんでいたお母様、海のように深い苦悩の中で、信じるものと家族に支えられ、晩年は苦悩の海に漂う、それら信じ合えるものとの珠玉の記憶に安らぎを見出していたとのことです。

現代は、金銭に代表される物質主義の蔓延と社会の解体、それに伴う、個人主義の拡大、そのことによって引き起こされる自我の肥大が、私たちの悩み、苦しみの大きな原因の一つだとあります。

姜尚中さんは、信じるものが必要だと言います。心の拠り所となる「帰る家」が必要だと言います。

科学の力には限界があると言います。福島の原子力発電所の事故を見せつけられた私たちは納得してしまいます。科学でもない、ましてや、お金や物でもない、自分の外にあるものではなく、自分自身の心を信じろと言うのです。

姜尚中さんは、自分自身の心を信じて、まじめな態度で人や状況をまるごと引き受け、生きよと言います。まるごと引き受けるためには、自分を忘れよと言うのです。

そう、物質主義からの脱却を図る有心は、お金や物に心をとどめない、とらわれない無心です。人やものにまじめな態度で心をこめて接する有心も、自分を忘れて、自分に心をとどめないで、人やものをそのまま引き受ける無心なのです。

無心で受け入れる強さを思った時、ある詩を思い出します。

星野富弘さんの「やぶかんぞう」という詩です。星野さんは、中学校の体育の先生になってすぐに、事故で首から下の自由を失いました。それから、努力を重ねて、口で、筆をくわえ、絵や詩を書くようになりました。

「身体は不自由になったが、自由な心は残っていた。苦しみや悲しみの中で、私を思ってくれる人たちの優しいところにも、たくさん出会った。生きていて良かった。」と言います。

やぶかんぞう

いつか草が

風に揺れるのを見て

弱さを思った

今日

草が風に揺れるのを見て

強さを知った

風に揺れる草は無心の姿であります。身体が不自由になった時、星野さんは、自分の身体に心がとどまってしまう、弱さを見てしまったのでしょうか。

口に筆をくわえ、無心に努力を重ね、絵や文字を書く事ができるようになり、人やもの

とまじめに接することができるようになった時、草の風を引き受ける強さを見たのです。

「頓悟要門」に、無心を修めるには、坐禅をなさいとあります。

「信心銘」の提唱で山田無文老師は「運転手がハンドルを握ることがそのまま坐禅であり、利休が茶筌を持ったら何も思わん、柳生但馬守が剣を手にしたら何も思わん、そのまま坐禅です。能を舞う人は能を舞っているそのままが坐禅であり、ピアニストはピアノを弾くそのままが坐禅です。皆な自分を忘れて何も思わない」と言います。

姜尚中さんの言うまじめな態度で、心を込めて、人やものに接していくことが無心であり、まじめに自分を見つめる態度そのままが坐禅なのであります。

星野富弘さんが書く、草が無心の強さであり、無心で風に揺れている草はそのまま坐禅をしているのです。